

対照的な年代に思うこと

旧職員 井 上 隆 夫

私の手許に『紅の血は燃ゆる』と題する単行本があります。漢文の長尾先生から「進呈する。あなたの世代の三中の卒業生が協力して仕上げたものだ。読んでやってくれ」と手渡されました。太平洋戦争末期に愛知県半田の飛行機製作所の学徒動員で過ごした日々を数人の日記を追う形で編集されています。

昭和十九年四月から実施された『学徒通年動員』は徴兵適齢以下の者を対象に出されたもので、中学校三年生以上の生徒・学生の授業を停止して、年間を通して軍需工場などで労働に従事させるもので、国の命令で全国で実施され、三中も三年生以上の者が七月から動員されています。十二月末に東南海地震に遭遇、三中は不幸にして十三名の殉難者を出しますが動員は継続されます。戦時下でも上級学校の入試は否応なく迫り、しかも、この年には四年生は繰り上げ卒業が予定され、五年生と共に二学年が同時に上級学校を受験する事態となっていました。

三月三十一日動員先で四・五年合同の卒業式挙行。「式が終われば動員も終わり」とはならず、原則として上級学校に合格した者も含めて、引き続き動員先で働く事になっていました。なぜなのか？動員学徒は熟練した貴重な労働力として継続して確保する事が優先されたのです。戦争遂行の目的のために五年制の中学校を三年と一学期で卒業したり、二学年の同時卒業という歪んだ事態があろうとも各自が受け止めて、進められたのです。しかし終戦を境にして状況は変わります。昭和二十七年山城に赴任した当時、食料の配給制はなお続き、物資は不足し、戦時中と同じ苦しい耐乏の生活が続きましたが、気分では全く違ったように思います。新制高校は学区制・男女共学制が採用されるようになり、工夫し、協力し合って新しい時代の新しいものを創り出していく喜び、希望といったものがありました。自らの自由な発想で学園での活動を楽しんでいました。学園祭の仮装行列でトロイ戦争がテーマのものがあつたのを思い出します。古代ギリシャの甲冑（美術全集で学び、西陣の紋紙を上手に繋ぎ合わせて作り上げた）を装着した戦士と大きな木馬の行列。大喝采です。又、ある学年では自分たちで先生にお願いして得意とされる講話を放課後に聴く会を催し漸進会と称して生き生きと学んでいました。十才も離れていない戦後の生徒の学園生活は平和を象徴するもので、今後の継続が期待されるところです。